１１世紀に書かれた『源氏物語』は現存する世界最古の小説である。天皇の息子である光源氏の恋愛を描くとともに、当時の貴族の生活習俗が記されている。作者の紫式部（９７３？―１０１４？）は源信（げんしん　９４２－１０１７）と同時代を生きた人物であり、『源氏物語』にも『法華経』や比叡山、比叡山の僧侶らが頻繁に登場している。源信の名声は当時の宮廷貴族の間でもよく知られており、『源氏物語』の「第５３帖　手習」の中では、源信をモデルにしたと思われる僧が「横川の僧都」として登場し、重要な役割を果たしている。

『源氏物語』の終章である「宇治十帖」の主人公と言っても良い「浮舟」という女性は、薫と匂宮の二人の男性の間の恋で苦しみ、宇治川に入水自殺を図る。そして宇治川の大木の節くれだった根もとに流れ着き意識を失っている所をこの「横川の僧都」が加持祈祷をして助ける。後に浮舟自身の願いを受けて、この僧都が彼女を出家させている。

続く最終章「第５４帖　夢浮橋」冒頭では、光源氏の息子である薫が、延暦寺の根本中堂に頻繁に詣でて経典や仏像の寄進をしてきたことが記されている。この章の中で、薫は再び根本中堂に詣でる。

その翌日には、浮舟が忘れられず、薫は横川の僧都のもとに足を運び、次のような嘆きの歌を詠む。

「法の師と尋ぬる道をしるべにて　思はぬ山に踏み惑ふかな」

（「夢浮橋」内の薫の歌）

『源氏物語』では他にも比叡山に関する記述が登場する。「第１０帖　賢木」では、源氏の思い人である藤壺の中宮が、亡き桐壺院の一周忌の供養のため『法華経』を説く「法華八講」を比叡山の僧侶ともに行う。そしてその場で、藤壺の中宮自ら、他の大勢の人々とともに天台座主から受戒する。藤壺の剃髪を行うのは、その伯父である横川の僧侶である。